

旅 神 の 祭 祀

——沖縄・渡名喜島のシマノーシ祭素描——

笠原 政治*・石井 昭彦*

Rites of Communion with the Visiting Deities: *Shima nooshi* Cult
in Tonaki Island, Okinawa

By

Masaharu KASAHARA* and Akihiko ISHII*

目 次

I はじめに	1 準備
II 神と人の絆	2 ウンチケー（神迎え）
1 渡名喜島の現況	3 4日間の殿祭祀
2 御嶽と殿	4 ノーイガミ（神送り）
3 神人の組織	IV 神迎え＝神送りの構造
III 祭祀の過程	V シマノーシ祭の現状
——旧暦4月15日～5月1日——	——むすびにかえて——

I. は じ め に

この小論は、沖縄本島西方海上の小離島・渡名喜島で隔年に行われる来訪神の祭祀、シマノーシ祭の全過程を記述したものである。沖縄を中心にした南西諸島各地の村落には、時を定めて海の彼方の異郷から訪れ、祝福と豊饒をもたらす神々を饗応するという祭祀形式が広く見いだされ、これまでの文化人類学や民俗学の研究でも、この地域の独特な宗教観念や世界観を究明するための手懸りとして夙に注目を集めてきた〔近年の著作としては、住谷・クライナー1977、伊藤1980、比嘉1982、村武1984など〕。ただ概括的にみた場合、その中でも仮面仮装を伴うなど具象的な神々の祭祀については比較的豊富な研究の蓄積がみられるのに対して、シマノーシを含めて姿の見えない来訪神に関しては、祭祀のコンテクストや諸要素を丹念に洗い出した密度の高い記述資料そのものが意外に乏しいように思われる。そこで本稿では、できるだけ細かい分析や比較考察を控えて、まずはこの来訪神祭祀の全貌を正確に描き出すことに主眼をおきたい。

*社会学教室 (Dept. of Sociology)

渡名喜島のシマノーシ祭は別名シヌグ祭ともいい、ギレーミチャンガナシーまたはミチュマルガナシー（3年廻り、つまり2年に1度訪れる神の意）と呼ばれる遠来の旅神を迎え、饗応し、海上へ送るという形式で進められる同島最大の祭祀行事で、期間は、隔年旧暦4月15日のユレーヌユバル（神招請の儀礼）から始まり、27日のウンチケー（神迎え）、4日間にわたる神人共食（トン祭祀）を経て、5月1日のノーイガミ（神送り）まで続く。この祭祀については、すでに18世紀初めに編纂された『琉球国由来記』〔1713〕の渡名喜島の条に「四月ニ、日撰仕リ、島直シ祭祀トテ、千今仕来タル由来。……（中略）蕃薯芋神酒小樽三ツ完、相調得居テ、ノロ・根神、御タカベ。サバクリ・百姓中、御拝仕ル也」（下点引用者）という記載があり、琉球王国の時代から受け継がれてきた神事であることがわかる。拙見の限りでは、シマノーシ祭に関する記事はこれ以外の歴史文書には見当らず、また明治以降の沖縄研究でもほとんど言及されることがなかったようであるが、つい最近になって、甲南大学地域文化研究会〔武藤・平野・中沢・中林1981〕による観察調査が行われ、またすぐれた民俗誌である『渡名喜村史』〔1983〕下巻に地元の比嘉松吉氏による詳細な記録が掲載されたことで、この旅神祭祀の輪郭がようやく明らかになってきた。

横浜国立大学文化人類学ゼミでは、1982年以来、計4回にわたって渡名喜島の調査を実施してきた。村落の祭祀的世界の解明が主たる目標であるが、幸い笠原と石井は、同島の神事を担当する神人（神職者）の方々の御厚意で、1985年新暦6月に行われたシマノーシ祭の全期間に立会うことができた。以下の記述は、その際の観察資料に基づき、さらに同島の祭祀生活に関する必要最少限の説明と簡単な研究上の展望とを付け加えたものである。

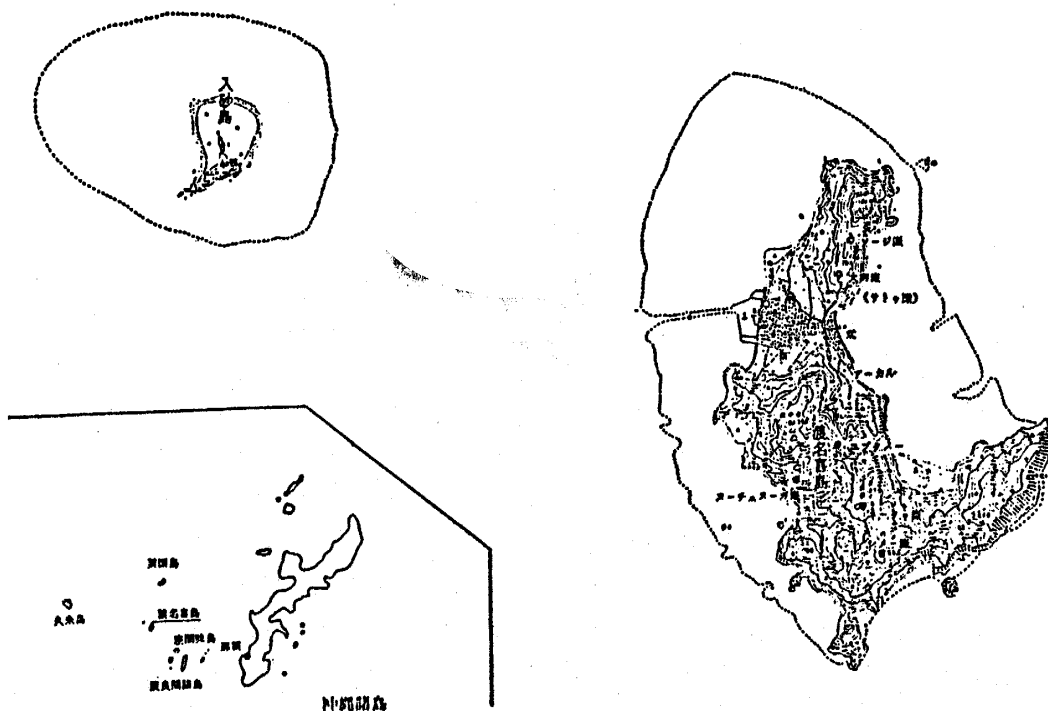


図1 渡名喜島

II. 神 と 人 の 絆

1. 渡名喜島の現況

渡名喜島は那覇の西方およそ59キロに位置する小離島で、広大な珊瑚礁に囲まれた面積4平方キロ弱の主島のほか、西側に無人の属島・出砂（入砂）島を擁する。交通は那覇から定期船で約2時間半。島の南北は大部分が岩山からなり、中央部にひらけたわずかな平坦地に人家が集中して1集落を形成している（図1）。1985年現在、住民登録上の人口は572人、219世帯。東・西・南の3区に分かれているが、行政的には全体で渡名喜村1村である。農業は砂地を利用した自給的な野菜類などの栽培が主体で、全体に振わない。1904年に導入され、一時は盛況を呈していたカツオ漁も、今ではほぼ衰退してしまった。若年層を中心にした人口の島外流出も著しく、沖縄本島の周辺離島中でもとくに過疎化が進んだ島の一つである。

2. 御嶽と殿

渡名喜には年間を通じて豊作や豊漁、住民の健康や安全を祈願する神事が数多いが、それらの祭祀が行われる聖地の構成はきわめて入り組んでいる。まず沖縄の代表的な聖地である御嶽（ウタキ）は、渡名喜の場合、主島の丘陵部に4ヶ所、出砂島に4ヶ所あることが確認されている〔仲松1979〕。しかし、今日ではそれらのすべてが信仰の対象になっているわけではない。むしろシマノーシ

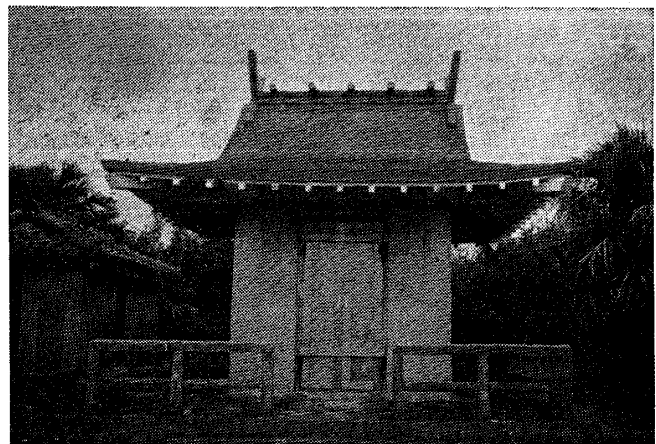


写真1 サトウの拝所
正面がサトウ宮、左奥がジョームイカドウムイ

表1 御嶽と殿

御 嶽 (ウタキ)	殿 (ト ン)	古 名 (ヤシキ・マキヨ名)	シマノーシの 祭祀日(旧暦)*	各 殿 の 所属戸数
大 御 嶽 …… サトウ殿 (サトナカムタヌイビウシジガナシー)		ナカンドヌマグルー (サトウナカムタ)	4 月 28 日	68
ソ ー ジ 嶽	ク ビ リ 殿	クビリマチュー (ウ ブ ル ク ー)	4 月 27 日	66
ヌーチュヌーガ嶽	ニ シ バ ラ 殿	ユアギマチュー	4 月 29 日	49
ネ ー ク ヲ 嶽	ウ エ グ ニ 殿	ア ラ マ チ ュ ー	4 月 30 日	55

*旧暦4月が30日までの場合

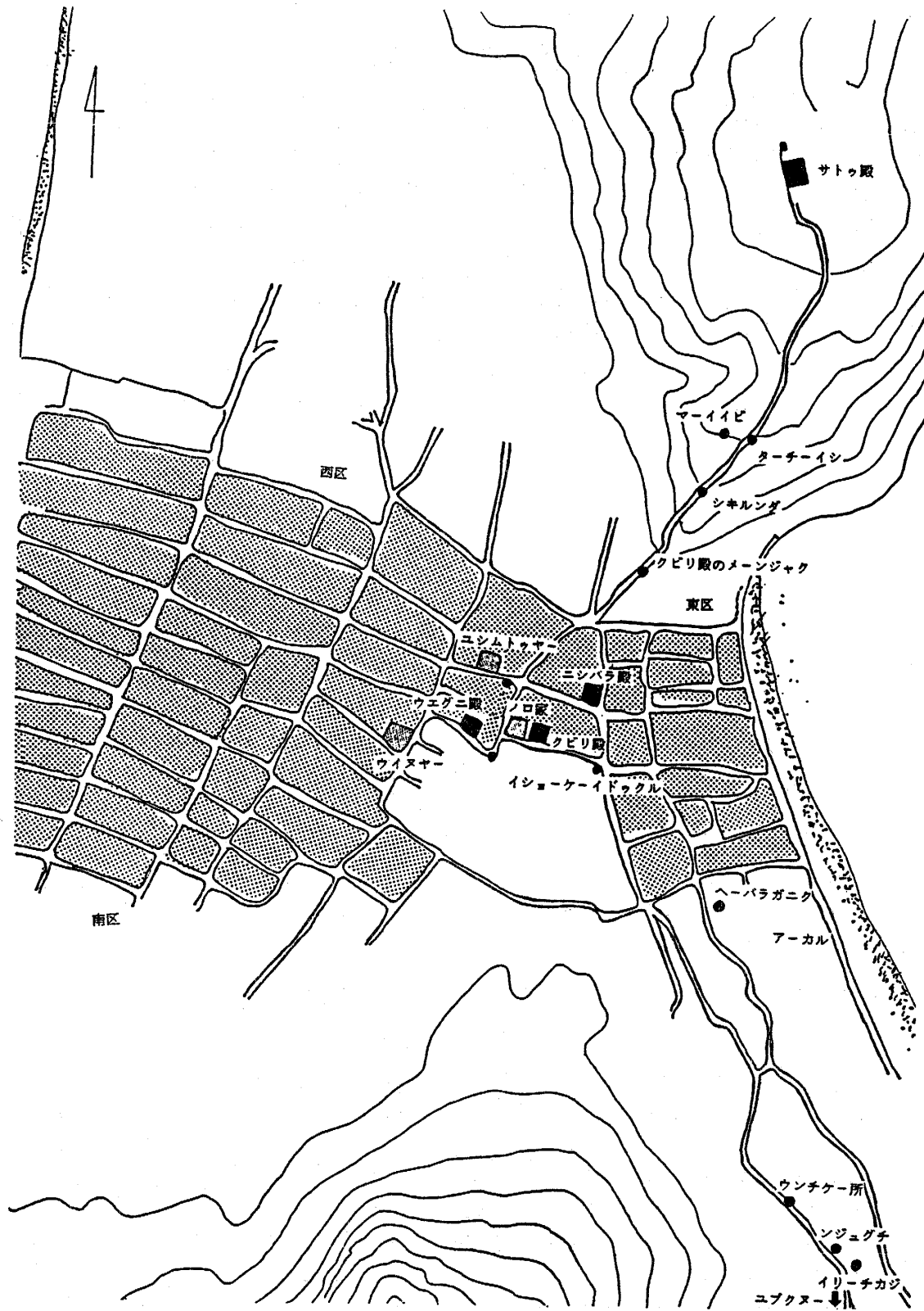
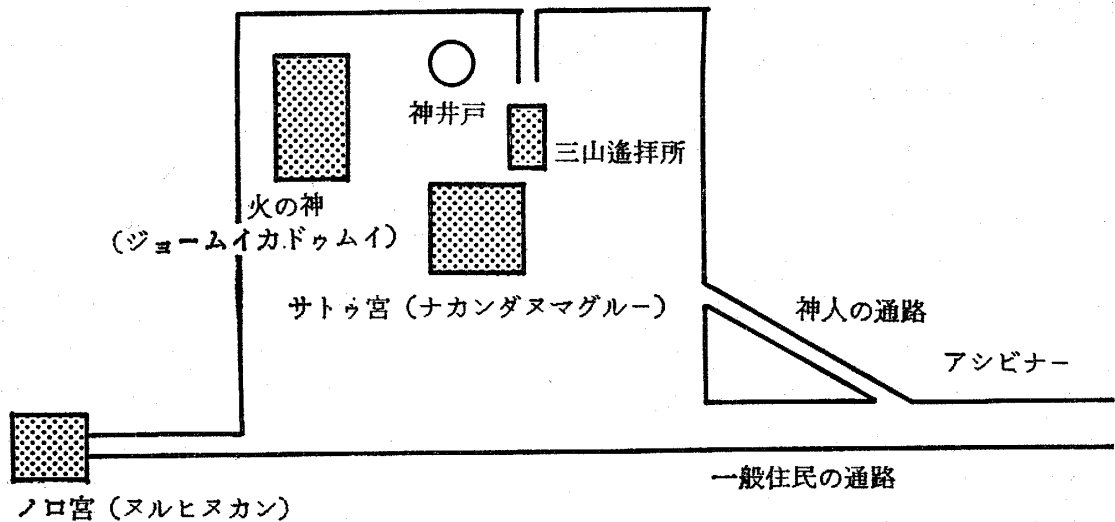


図2 シマノーシの祭祀場



祭との関連で重要なのは、サトウ、クビリ、ニシバラ、ウエグニの4つの殿（トン）と呼ばれる拝所である表1・図2）。そのうち、島北の小高い丘上に位置するサトウだけは御嶽と殿が場所的に一致しており、神域にはサトウ宮（ナカンダヌマグルー）、ノロ宮（ヌルヒヌカン）、火の神（ジョームイカドゥムイ）、神井戸（アガリジョーヌカー）、南山・中山・北山への遙拝所（ウトゥーシイビ）などの祈願所がある（写真1・図3）。現在、年間の公的な村落祭祀は、大部分がこのサトウを中心にいとなまれている。それに対して、他の3つの殿はいずれも集落の内部にあり、狭い敷地の一角に火の神祠をまつただけの簡素な拝所である。各殿は島の草分け系統の屋敷跡と伝承されており、それぞれ正式の古名（大五良屋敷；ウーグルヤシキ、または旧村落；マキヨの名称）をもっている。本来これらは山上の御嶽への遙拝所であったと考えられるが、現在では隔年に1回、シマノーシ祭のときにしか使用されず、祭祀機能のうえでは来訪する旅神の接待所と言う方がふさわしい。ただし、殿祭祀の順序に関してはサトウではなくクビリ殿が先（第1日目）であり、また後述するように旅神を迎え＝送る役職はクビリ殿所属の特定系統の者に限られていることなどからみて、年間の祭祀におけるサトウ殿の優位性と、隔年のシマノーシ祭におけるクビリ殿の優先性との間には、ある種の齟齬がみとめられる。いずれにしろこのような祭祀場の複雑な構成については、仲松弥秀氏が、かつて丘陵部にあった4つの「血縁村落（マキヨ）」の移動・併合による渡名喜村落の形成という歴史的な文脈で克明な実証研究〔1979〕を試みた結果、ほぼ大局的な見通しが立つようになった。ここでその研究に検討を加える余裕はないが、シマノーシ祭に顕著な複合性や多面的な祭祀形式が、そうした島社会に沈澱した歴史的な記憶をさまざまに反映していることはまちがいない。

以上の4つの殿にはおのおの殿頭（トンガシラ）と呼ばれる世襲的な祭事担当家があり、供物の準備をはじめシマノーシ祭の諸事をとりしきっている。他の住民は、東・西・南の地域区分にかかわらず全員がいずれか1つの殿に所属し、それぞれの殿祭祀の日だけに祈願に参加する。このトンニンジュと呼ばれる殿の祭祀集団は、原則的には親子関係に基づいて所属が決められてはいるものの、集団全体に共祖・血縁の観念はなく、いわゆる

「門中」的な結合とも直接の関連はない。こうした4つの集団への分属制が成立した事情は定かではないが、おそらく歴史的な経緯としては、隣島の座間味で報告されているのと同様〔松園1970〕、王国時代の行政的強制による住民配属の遺制といった側面が考慮されるべきであろう。

3. 神人の組織

渡名喜島で年間の村落祭祀や祈願の中心になるのは、神人（カミンチュ、島本来の呼称はサシハーまたはサシハーター）と呼ばれる神職者たちである。戦前は20人以上もいたと言われるが、現在では女性11名、男性1名の計12名を数えるにすぎない。この神人になるには、(1)古くから神人を出す系統としてカミブン（神を招請するための聖なる盆）を所持する宗家（ムトッヤー）の出身であること、(2)一定の霊力（セジ）を有すること、の2つが資格条件となる。もっとも前者のカミブンをもつ家は全部で28戸もあり、その各戸から神人が出ているわけではないので、カミブンの所持はただ神人を出す1つの条件にすぎないと考えた方がよさそうである。神人の地位継承に関しては、ムトッヤーの家系に沿ってオバからメイへ受け継がれる原則はみとめられるが、渡名喜では、「神人になったら死ぬまで神人」という生涯神人制が採られている事情もあって、隣接する世代間での引き継ぎが困難な場合もあり、実際には2世代以上隔っての継承が多い。また嫁継ぎの例もままある。

さまざまな祭祀行事に際して、神人は個人の資格ではなく、複数で構成された神人組織として祈願などをつかさどる（表2）。その組織の中では、地位や権限のうえで、まずノロとそれ以外の神人とが大別される。これはかつての琉球王国の時代に確立された神人組織において、ノロの優位性を制度化した当時の宗教政策の名残りという一面をもっている。また、主にシマノーシ祭との関連で、ギレーミチャンとウブチミチャンという区分も

表2 神人の構成

神 人	性別	役 職	*1	所 属 殿	*2	備 考
①S U	女	ノロ	ウ	サト	参	ノロの補佐役 } 兄妹神
②N T	女	サヌアン	ウ	クビリ	参	
③Y T	女	クシレー	ギ	クビリ	不	
④H H	女	ウミナイ	ギ	サト	参	
⑤K T	男	ウミキー	一	サト	不	
⑥U U	女	イリスナ	ギ	ウエグニ	不	
⑦M U	女	―――	ギ	ニシバラ	不	
⑧T H	女	―――	ギ	ウエグニ	参	
⑨M H	女	―――	ギ	ニシバラ	参	
⑩T T	女	―――	ギ	ウエグニ	参	
⑪Y U	女	ウブルクー	ウ	クビリ	参	
⑫T T	女	ウブルクー	ウ	クビリ	参	

*1 ウ：ウブチミチャン ギ：ギレーミチャン

*2 参は今回のシマノーシに参加、不は不参加

みとめられる。すなわち、神人たちは各神事に際して、頭にマンサージと呼ばれる白い鉢巻状の布を着けるが、シマノーシや他のいくつかの祭祀では、ウプチミチャンがこのマンサージだけなのに対して、ギレーミチャンはさらにその上にンチャアブイ（サンキライという蔓草で作った特別の神冠）を着けるのである。このギレーミチャンとウプチミチャンとの区分について、前者がシマノーシに訪れる旅神で、後者はその旅神を迎える島神と説明されているが、ギレーミチャンは別名タカサビト（マンサージとンチャアブイの両方をつけることから、島神でありかつ旅神でもある神人の意）というセジ高い神人を表わすともいい、おそらくギレーミチャンについては、神人自身を来訪神とみるより、むしろ島神の中でもとくに旅神とコンタクトできる神人とみなすのが適当だと思われる。さらに、渡名喜の神人組織にはもう1つ別の特徴がある。それは神の座組（ジャグン）といって、序列の一種とも考えられる。この序列は、神人たちが一行で行進したり座ったりするときにみられるもので、どんな儀礼場面でも厳密に守ることが求められる。座組は、年齢、就任期間にかかわらず上からノロ、ギレーミチャン、ウプチミチャンの順で、さらにギレーミチャン、ウプチミチャンの中でも表2に示したような序列がある。（なお、表の記載は1985年6月現在の神人構成である。）

渡名喜には年間を通じて約15、6に及ぶ村落レベルでの祭祀があり、その大部分に神人が関与する。またそれらの定期的行事とは別に、厄払いや家庭の祈願など不定期の神事が月に何度となく行われ、神人、とくに島に在住している神人たちは思いのほか忙しい。その中でも隔年のシマノーシ祭は島の最大の行事であり、都合で転出している神人も、できうかぎり帰郷して祭祀に参加する。老齢や病弱の理由から参加できない神人の場合も、代理人をたて、祭祀に使用する米や酒などの供物を神前に献上するのが通例である。

III. 祭祀の過程：旧暦4月15日～5月1日

1. 準 備

シマノーシ祭の主要部分は、言うまでもなくウンチケー（神迎え）からノーイガミ（神送り）までの5日間であるが、実際にはその約10日ぐらい前から、祭祀に向けてのさまざまな準備が整えられる。ここでは、まずその準備段階にふれておきたい（表3）。

表3 シマノーシ祭の過程

	午 前	午 後	備 考
旧暦4月15日～24日		ユレーヌユバル	
25日	アマガシ作り		
26日	タティフトッキウガン	ンチャアブイ作り	
27日	ウンチケー	クビリ殿 ユバル	神人の籠り始め
28日		サトゥ殿 ユバル	ヌカクベ（各家庭）
29日		ニシバラ殿 ユバル	
30日		ウエグニ殿 ユバル	トゥクミチ（各家庭）
5月1日	ノーイガミ		

シマノーシ祭は、旅神を招請するための神人の儀礼、ユレーヌユバルから始まる。この儀礼は、旧暦4月15日から20日までのうち吉日を初日とし、前半2日はノロ家（屋号：ウーヌルヤー）で、後半2日は国の嶽元とされるウイヌヤー（屋号）でそれぞれ行われる（今回の場合は4/16～4/19）。内容は4日とも共通で、神人たちははじめに当事家のブン（聖なる盆）と仏壇に対して屋敷を祭祀に使用する旨を告げた後、庭に降りて東に向かい一列に着座する。座ったまま東、サトゥ殿、東の方向にタキウクシのオタカベ（祈言）を唱える。このタキウクシというのは、シマノーシの開始を島内の全御嶽に、そしてまだ来ぬ旅神に知らせるためのものだという。タキウクシが終わると、つぎに東面のまま、④と⑪は太鼓を、他の神人はクバ扇を手に取り立し、ニートゥイ・ハートゥイが行われる。この儀礼は、まず遅めの太鼓のリズムに合わせてノロとそれ以外の神人とが輪唱形式の唱和をした後、太鼓がアップ・テンポになり、神人たちが舞う仕草をとるもので、2回繰り返されて全行程が終了となる。後日の殿祭祀にも同様の所作がみられ、神招請の意味をもつ神遊びの儀礼と考えられる。

またこうした儀礼とは別に、各殿頭（トンガシラ）の家ではこの頃供物のミキに使用するウコージ（麴）が作られる。他方で神人たちは、ノロ家に集まってタティフトゥキウガン（願立て・願解き、の意）に供えるためのアマガシ（米と麴で作る神酒）を準備する。そして神迎いの前日（4月26日）には、サトゥ殿でタティフトゥキウガンが行われる。このウガンの目的は、神人たちが一昨年のシマノーシのときに立てた願いを解き、あらためて祈願をするというもので、サトゥ宮からノロ宮、ジョームイカドゥムイ、井戸、三山のウトゥーシの順に、前日用意しておいたアマガシ、米、魚を供えて拝む。これによって神迎いの前日は一段落するのである。

以上のウガンは26日の午前中に終わり、午後になると最後の準備、ンチャアブイ（神冠）作りがある。作り手は祭祀のときにンチャアブイを着用するギレーミチャンたち（④⑧⑨と⑩の代理人）で、島南の丁度岩山への登り口にあたるイリーチカジ（地名）に出向き、そこから少し山に入った所で蔓草を刈って神冠に仕上げる。個数は現在のギレーミチャンの人数分で、当日は計7個出来あがった。作られたンチャアブイは、明日の神迎いまでンジュグチと呼ばれる地点の岩陰にしまわれる。旅神の表象と結びついたンチャアブイが、このように一種洞穴にも似た島南の岩の陰に隠され、また後述する最終日の神送りにおいて、今夜は島北の岩陰に置かれるという事実は、シマノーシ祭にあらわれる神観念を考えるうえで注目に値する点と言えよう。

2. ウンチケー（神迎え）

4月27日から始まるシマノーシ祭の主要部分は、図式的に言えば、旅神を迎え・送するというレベルの異なる複数の儀礼場面が組み合わされた入子式の構成になっており、各場面が時間的・空間的に祭祀全体を分節化していると考えられる。それらは(a)神人による迎え＝送り、(b)ウブルクーという特別の役職者による村落全体の迎え＝送り、(c)トンニンジュによる各殿の迎え＝送り、の3つのレベルに分けることができる。初日の27日に行われるのは、この中でまず(a)(b)の神迎え（ウンチケー）と、クビリ殿における(c)の祭祀である。

この日の朝から女性神人は全員がノロ家（ウーヌルヤー）に集まって各家庭の祈願を行う。上潮になる昼頃、クビリ殿の殿頭が同家を訪れ、門前でウンチケーに赴く旨の口上を述べる。この殿頭を含めて、神迎え＝送りにはかならずウブルクーと呼ばれる4名ほど（今は女性が含まれるが、本来はすべて男性）の役職者が神人に随伴する。彼らはクビリ殿に所属する特定系統の世襲的役職であり、一説にはシマノーシ祭がもともとクビリ殿から始まったことの名残りともいう。

案内に応じて神人たちは島南のアーカル（字にあたる地名）に向けて神迎えに出発する。列はノロ①、サヌアン②、ギレーミチャン④⑧⑨（ただし⑩は高齢のため不参加）、ウプチミチャン⑪⑫の順で、①⑪が太鼓、④⑫が松明をもつ。この列順は祭祀の終了時まで一貫して同じである。ノロ家を出た神人は、「神は裏道を通る」と説明されるように、独特な神道を進んでいく（図2参照）。まずノロ家からは時計廻りに集落内を抜け、イショーケーイドゥクル（衣装替えの場所）に全所持品を置いてから畑地をアーカルに向かう。その際、一部分では農道を外れて、作物が植えてある畑の中を突切る。この神人に対して、ウブルクーの方は別の道を通ってアーカルのある地点（ウンチケー所）にいたる。彼らはそこから先に入ることにはできない。神人たちはさらに50メートルほど奥に進んだ所で二手に分かれ、3名のギレーミチャンは昨日ソジュグチの岩陰にしまっておいたソチャアブイ（神冠）を被って戻り、再び他の神人に合流する。これが(a)の神人による神迎え、つまり島神が旅神を迎える儀礼場面である。以前はもっと南の山上にあるユブクヌーまで神迎えに赴いたと言われ、現在みられるのは多少とも簡略化された形と考えられる。

合流した神人たちはウブルクーが待つ場所までくると、西に向かって一列に着座する。（この西面は、後日神送りの際に東面するのと対照的である。）対座した4名のウブルクーは、用意したアマガシをノロから順に献上し、(b)の神迎えが行われる。これをトゥイケーといい、全神人に対して2巡繰り返される（写真2）。このトゥイケーは沖縄の対面的な共食の一形式である「取替え」とも考えられるが〔たとえば、瀬川1969〕、実際にはこの場面で両者が相互に食物を取替え＝交換するわけではない。

トゥイケーが済むと、神人はイショ

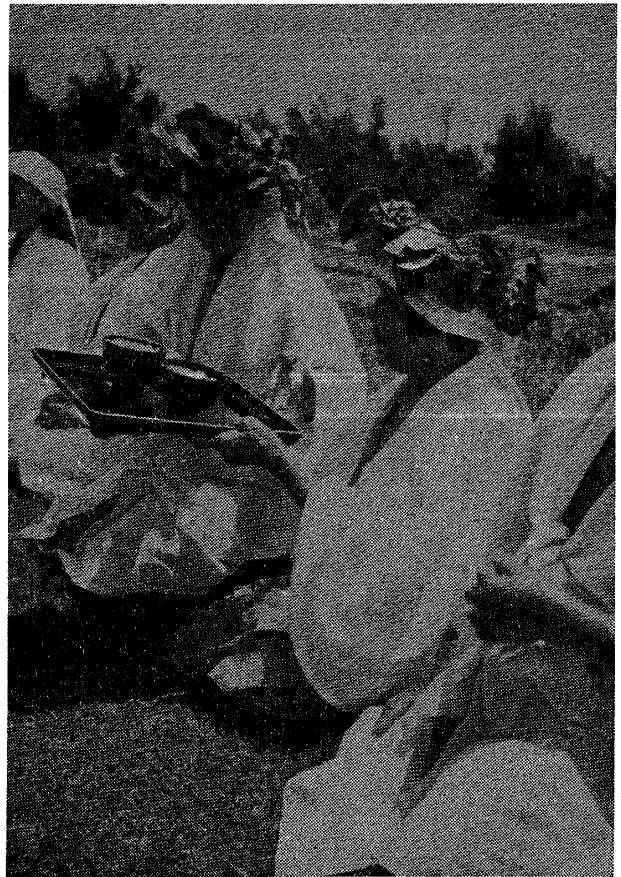


写真2 神迎え（アーカルにて）

ーケーイドゥクルで手足を洗い、ハレー、ドゥギンなどを着用して正装し、ノロを先頭に太鼓を叩きつつクビリ殿へ向かう。道順は往路の神道を逆にたどる。今や「神は神人とともに歩いている」のであり、当日の同行観察中にも、神人の前を通る子どもが激しく叱り飛ばされる光景が幾度か目撃された。

3. 4日間の殿祭祀

神人やウブルクーによって旅神が迎え入れられると、いよいよ4日間にわたる殿祭祀が始まる。初日より順にクビリ、サトゥ、ニシバラ、ウエグニと日毎に祭場をかせ、トンニンジュが、それぞれ自分の所属する殿の祭日に各殿へ出向いて神（神人）を迎えるのである。この4日間の殿祭祀は、内容的に迎え―共食―送りというほぼ共通した順序で進められるが、細部では各殿ごとに少しずつ異なった面がみとめられる。以下、簡略に4日間の流れを追ってみよう（図4）。

第1日目（4月27日）：クビリ殿

殿祭祀の初日はクビリ殿で、この日は朝から祭場にシートや天幕が張られ、供物が運びこまれる。ウンチケーが終わる頃には準備も完了し、殿の成員がおのおの料理一皿と酒一瓶を手に集合する。まもなく正装に着替えた神人たちが独特の裏道を通って殿に入場する。参加者がすわる位置関係は各殿とも共通で、拝所の祠に向かって右横に神人、残りの三方に殿の構成員が着座するが、クビリ殿の場合にはもう1人、ほぼ中央の位置に、殿頭の家であるクビリヤー（屋号）出身の女性（当主の父方オバにあたる）が座を占めていた。神人が入場する際に特別な儀礼はなく、祭祀は、まず殿頭が神人に茶を献上することから始まり、つぎにクビリ殿に所属する②⑪⑫が祠の正面に進み出て拝みを行い、他の神人や殿の成員もこれにならって手を合わせる。拝みが終わると、殿頭が拝所から供物の酒を取り出して、各神人との間で盃を交換する。つづいてミキ（芋と麴で作った酒の一種）をふるまい、土産として乾魚の包みを手渡すと、これを機に神人たちは祠に合掌して殿を退出する。時間的には、この間わずか30～40分程度である。一方、殿の構成員たちは、拝

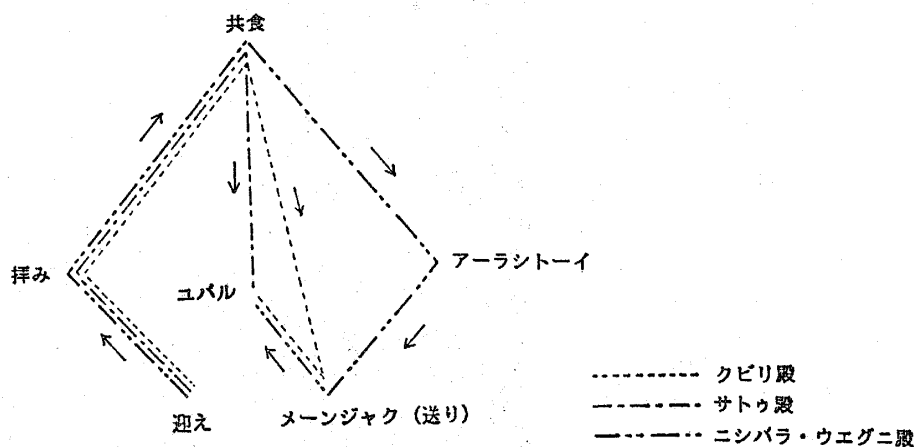


図4 各殿の祭祀

みが終わってから各自持ち寄りの料理を開き、殿頭が用意した酒、ミキ、魚と合わせて会食にうつる。この会食は、供物である酒、ミキを全参加者に回すことからみて、神人共食の一形態と考えられる。また各自の携帯品は、沖縄・奄美でよく知られた「一重一瓶」型であるが、この場で互いに料理を取替え合う光景はあまり見られない。



写真3 アシビナーでのユバル儀礼

神人の退出時には、入場のときと同じく殿の中では特別な儀礼はないが、ただ殿頭（クビリ殿の場合はこれにウブルクーが加わる）だけは神人の列に随行し、両者はサトゥ殿への登り口近くのメーンジャクと呼ばれる場所に着座して、トゥイケーを行う。東面してすわった神人に対して再び乾魚と松明の篠竹が渡されると、神人たちはここでウブルクーと別れ、サトゥ殿に登り始める。このメーンジャクはサトゥを除く3つの殿にみられるもので、殿からの神送りと考えてよい。

サトゥ殿に登った神人たちはしばらく休息をとり、夕方近く（午後4時過ぎ）になってからユバルの儀礼を行う（写真3）。このユバルは、前半2日はサトゥ殿の脇にあるアシビナー（図3参照）で、後半2日は集落はずれの島南の畑地、ヘーバラガニク（図2参照）で行われ、内容は4日間ともまったく同一である。すなわち、まず神人たちが一列になってすわり、南北南の順に向きをかえてオタカベを唱える。その後立ち上って、今度は先述したユレーヌユバルと同じニートゥイ・ハートゥイが南面して行われ、これが2回繰り返された後、再び南一北一南を向いてオタカベをあげて終了する。かつてはこの日から4日間、神人たちはサトゥにあるジョームイカドゥムイ（火の神をまつた拝所）でユドゥマイ（籠り）に入ったと言われるが、のちにそれが2日間に短縮され、今ではまったく籠らずに、ユバルが終わるとノロ家に戻ってからそれぞれに帰宅してしまう。ただし、神衣装やソチャアブイだけはシマノーシの終了時までノロ家に置いたままにしており、この点がかつての籠りの形式を今にとどめている部分と考えられる。

第2日目（4月28日）：サトゥ殿

前日と同様、午前9時過ぎからノロ家に神人たちが集まって各家庭の祈願を終え、11時過ぎにサトゥ殿へ向かう。サトゥ殿では、殿祭祀に先立って神人が殿頭を伴い、サトゥ宮、ノロ宮、ジョームイカドゥムイを拝む。拝みが終わると神人は正装に着替え、殿の祭祀が行われる。クビリ殿と異なる箇所は、拝みがサトゥ殿所属の神人①④を中心にするのと、この殿にかぎってメーンジャクがないということである。殿の成員は会食が済むと帰宅するが、神人たちはそのまま夕方までとどまり、アシビナーでユバルを行ってから下山する。なお、この日は殿の祭祀と別に、各家庭で朝早く重箱にハッタイ粉（小麦を炒っ

た粉)を入れ、火の神に供えてイワリ(祈詞)をあげる。この粉はヌカクベーという。

第3日目(4月29日): ニシバラ殿

午前中ノロ家で各家庭の祈願が行われ、昼過ぎに神人たちは正装してニシバラ殿へ向かう。殿の祭祀はこれまでの2日間とほぼ同様であるが(写真4)、ただこの殿では、神人にブクブクという米の粥が献上される。そしてもう1つ、この日からは前2日間のクビリとサトゥ殿にはない退出時の儀礼、アーラシトーイが加わる(図

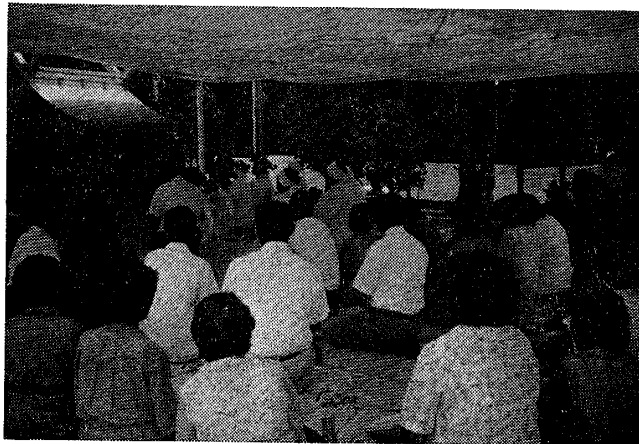


写真4 殿祭祀(ニシバラ殿)

5)。すなわち、殿を退出するときに、神人たちは、ニシバラ殿では南西隅に設けられた2本のパイプ製手摺(新たに改修されて今回のシマノーシから使用)を、翌日のウエグニ殿の場合には2本の竹竿の間を、それぞれ図5のような配置で東から西に通り返ける。その際に各神人はンチャギ(扇)で竹竿を叩きながら「アーラシトーイ、アーラシトーイ」と連呼する。このアーラシトーイは旅神の舟出を象徴する儀礼とされているが、神人が西に向かって退出することや最後尾に船頭役として出砂神⑥が位置することから考えて、旅神はここで帰路につくというよりは、むしろ西方の属島・出砂島に向かうと解釈した方が自然かもしれない。これが済むと、殿を出て最初の四つ角でメーンジャクがある。神人はノロ家で休んだ後、夕方からヘーバラガニクでユバルを行って第3目は終了する。

第4日目(4月30日): ウエグニ殿

ノロ家での家庭祈願の後、昼頃に神人たちは島の旧家・ユシムトゥヤー(ハクヤー)へ出かけて、同家のブンを拝む。この拝みの由来ははっきりしないが、同家とやはり旧家のカマヤーが神人のユクイドゥクル(休憩所?)になるという伝承もあり、おそらく何らかの古い祭祀慣行の名残りだと推定される。帰るとウエグニ殿からの迎えがきて、殿の祭祀が始まる。拝み手の中心は神人⑧⑩で、ミキや乾魚が献上された後、アーラシトーイにう

ニシバラ殿

ウエグニ殿

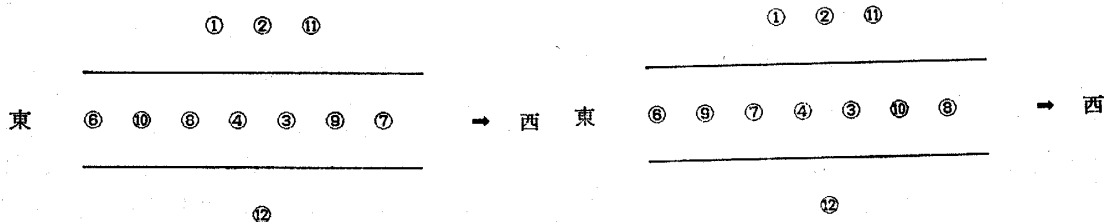


図5 アラシトーイ儀礼と神人の配置

つり（写真5）、さらに殿を出た
すぐ角の所でメーンジャクが行わ
れる。夕方には前日と同様ヘーバ
ラガニクでユバルをあげ、これで
4日間の殿祭祀はすべて終了す
る。この日は第2日目と同様、各
家庭でトゥクミチという簡単な祭
祀がある。これは早朝、火の神に
魚を供え、イワリ（祈詞）をあげ
るだけのもので、2日目のヌカク
ペーもこのトゥクミチも、元来は
神人が各家庭を廻って行っていた
ようである。今では神人の数が少なくなったため、ふつうは主婦がこれに代わっている。



写真5 アーラシトーイ儀礼（ウエグニ殿）

このように、殿の祭祀はシマノーシ祭の実質的な中心部分をなしており、人によってはシマノーシを「トンの祭」とも表現する。ほぼ類似した内容が4日間反復されるという並列的な構成であるが、各殿の構成員は他の殿に対して概して無関心であり、その意味ではシマノーシ祭を、独立性の高い4つの殿祭祀の複合体と考えることもできる。先に指摘しておいたように、そうした特徴は、多分に渡名喜村落の形成という歴史的文脈で説明されるべきものであろう。

4. ノーイガミ（神送り）

5月1日明方の神送り（ワークイまたはノーイガミ）は、シマノーシ祭の期間中で最も荘厳な場面といえる。この日、4日間にわたって饗応を受けた旅神が帰途につくのであり、朝早く送り出すのは、神の乗る幻の舟が満潮時に出立するためという。儀礼は、神迎えと同様、(b)ウブルクーによる送りと、(a)神人による送りの2段階に分かれている。

まだ薄暗い明方、神人たちはノ
ロ家を出発して島北へ向かう。太
鼓は叩かない。途中からウブルク
ーが一行に従う。サトゥ殿の丘へ
続く坂道を登り、東側に海が望め
る草地（シキルンダ）までくると、
神人たちは一列のまま東を向
いて着座する。ウブルクーが各神
人に酒盃をまわし、トゥイケーが
行われる。これが(b)にあたる神送
りである。ウブルクーの役目はこ
こで終わり、神人だけがさらに坂



写真6 神 送 り

を登っていく。

ターチャーイシと呼ばれる二枚岩の所で、ノロ①とウミナイ④は管掌する拝所に祭祀終了を報告するため、サトゥへ登っていく。他方、ギレーミチャン（当日は⑧⑨のみ）は、そこから10メートルほどの西の草叢にあるマーイイビという岩に拝礼し、クバ扇を手に、岩の周囲を時計廻りと逆に7回舞うようにまわる。これをマーイマイという。神人自身も意味を説明できない所作であるが、あるいは旅神が神舟に乗りこむ仕草かもしれない。これが済むと、ギレーミチャンが頭に被っていた神冠は、すべてターチャーイシの岩陰に置かれる。

ノロ、ウミナイが戻り、再び全神人がターチャーイシの所に集まって、今度は(a)の神人による神送りが行われる（写真6）。全員が東を向いて一列に並び、マンサージ（鉢巻様の白布）をはずし、クバ扇を上下に振りつつノーイガミのウムイ（神歌）をうたう。東方の海上へ舟出する旅神を送りだすウムイである（『村史』459—460頁参照）。徐々に坂道を下りながら、手にしたマンサージをも振って、声をそろえた神人たちのウムイは、4回、5回と繰り返される。午前7時前。東の海面が陽光に輝きはじめる頃である。

旅神を見送った後、神人たちはノロ家に戻る。最後の祈願が昼近くまで続けられる。

IV. 神迎え = 神送りの構造

シマノーシ祭が3つのレベルの神迎え = 神送りを入子式に組み合わせた構成になっていることは、先に指摘しておいたとおりである。繰り返すと（図2を参照）、まず最も外枠として(a)神人による島南一島北での迎え = 送りがあり、具体的にはウンチケーとノーイガミの儀礼がこれにあたる。つぎが(b)ウブルクーによる迎え = 送りで、アーカルとシキルンダで行われるトゥイケーがその儀礼場面である。そして最後に、各殿では(c)殿頭を代表とするトンニンジュが神を迎え = 送る。これら3つのレベルに分けられる神迎え = 神送りの儀礼は、空間的にはそれぞれ(a)山もしくは小高い丘、(b)畑ないし丘の中腹、(c)集落内で行われ、また島全体を鳥瞰してみると、それらはほぼ島の東側を南北に引いた線上で集中的に展開されていることがわかる。一般に沖縄・南西諸島各地の来訪神祭祀において、神を迎え = 送るのは、山や浜、洞穴など集落の外、つまり日常の生活空間から外れた場所が多い。渡名喜の場合でも、(a)の山ないし丘は、祭祀のときを除けばふだんの生活ではほとんど近づくことのない外の空間として存在する。これに対して(c)、つまり殿の祭祀で、神を集落の外から内へ迎え、再び内から外へ送ることは言うまでもない。そこで注目されるのが、(b)の畑・丘の中腹における迎え = 送りである。この畑（ないしそれに相当する場所）のもつ意味をどう捉えるかは微妙な点であるが、少なくともシマノーシ祭の場面構成のうえでは、畑は集落の内と外を繋ぐ、あるいは内でも外でもある境界的な空間とみなすことができる。したがって、以上の神迎え = 神送りの祭祀空間を南北の方位軸に沿って図式化すると図6のようになる。これが本稿でいう入子式の構成であるが、同じものを円に喩えるなら、同心円的な構成と考えてもよい。ただし、この図式では明確に示せない点もいくつかある。たとえばサトゥ殿の空間的な位置づけがそれで、この殿は島北(a)ののさらに

外にありながら(c)の迎え=送りをするのである。サトゥは年間の村落祭祀において島全体の中心になる拝所であり、シマノーシ祭以外では他の3つの殿と決して並列的な関係にはない。また、サトゥの場所自体がかつては小集落（つまり内）であったという認識を多くの住民がもっている。そうしたサトゥ殿の位置づけを含めて、島の祭祀空間の構造についてはあらためて検討すべき問題が多い。

つぎに旅神の観念について簡単にふれておきたい。沖縄・南西諸島の来設神祭祀は、ふつうニライ・カナイの信仰と結びつけて論じられる。すなわち、遠い彼方の海上や海底に想像された異郷（あの世）ニライ・カナイから豊饒をもたらす訪問者を、人間の世界（この世）で迎え、歓待するための祭祀という見方である。しかしながら、シマノーシ祭の旅神をそのようにニライ・カナイからの来訪神と単純に考えるべきかどうかは難しい問題である。「旅神は、他所の島からやってくる」「ノーイガミのときには、それぞれの島へ帰る」「神の舟は辺土岬へ帰る」と渡名喜の神人たちは言う。また、神送りのウムイ（神歌）の一節にも「ヒドムイニ ヌウェーチ（辺土森に乗り合わせ） アシムイニ アシバチ（安須森に遊びなさって）」（『村史』459頁）とある。ニライ・カナイの観念をどう解釈するかは別にして、そうした点を考慮した場合、ここで旅神が海の彼方に想像された神の国から

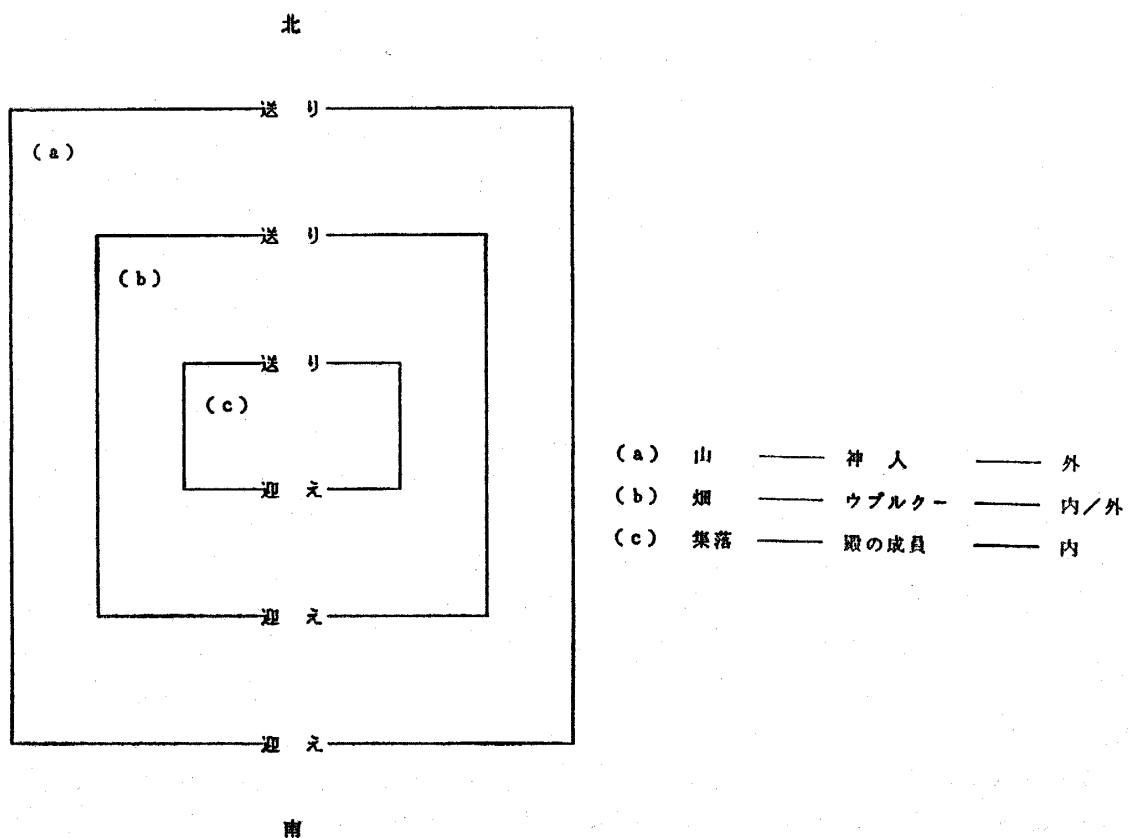


図6 神迎え = 神送りの祭祀空間

渡来するものと型通り記述することには多に疑問が残る。これまで本文中で、あえてニライ・カナイという語を用いるのを控えてきたのはそのためである。

シマノーシ祭と他地域の類似した祭祀との比較についても、2, 3の指摘にとどめたい。シマノーシが別名シヌグ祭とも呼ばれていることは冒頭で述べた。そこですぐに思いつくのは、沖縄本島北部の村々にみられるシヌグ祭である。しかし、概して男性中心の祭祀という色彩が濃いそれらのシヌグ祭と渡名喜のシマノーシ祭との間には、内容的に共通する点が乏しい。むしろ類似性が顕著なのは、やはり名護以北の諸村で——しばしばシヌグ祭と錯綜した分布状態で——行われるウンジャミ祭であろう。村落により差異が大きいので一概には言えないが、この祭祀は一般に女性神人集団による姿の見えない来訪神の迎え＝送りの儀礼を中心に構成されており、籠り、神遊び、舟走り儀礼、神冠の着用など、シマノーシ祭と共通する要素も多い〔比嘉1982, 伊藤1980, 小野1970など〕。また、もっと渡名喜の近くでは、慶良間諸島で昭和初期まで行われていた播種儀礼における来訪神ヤヘヌミチャンガナシーの迎え＝送り〔知念1934, 伊藤1980〕と、栗国島におけるヤガン折目の来訪神祭祀に、断片的な資料をみるかぎりでは、シマノーシ祭と酷似する面があって注目される。詳細な比較考察を今後の課題としなければならない。

V. シマノーシ祭の現状：むすびにかえて

「ずっと以前のシマノーシで、神様の太鼓の音が聞こえてきた」「白い馬に乗った神様が目に見えた」と渡名喜の年寄りたちは言う。かつてはこの祭日を機会にして子どもたちの衣服や履物を新調したという懐旧談も多い。しかしながら、今回観察できたシマノーシ祭が、そのように厳粛で、全島をあげて熱気につつまれていたと記すことは幾分躊躇せざるをえない。「ひとにぎりの年寄った司祭者たちが、見守る村人たちのない場所でさむざむと儀礼を行なっているのが目立つ」〔比嘉1982: 133〕という光景ではないにしても、現時点でこの神事に対する一般住民の関心が徐々に稀薄化してきているのは否めない事実であり、祭祀の大方を、実質的には女性神人や殿頭など少数の専門的役職者の手に委ねる傾向が強まりつつあるからである。もともとシマノーシ祭は神人を中心にした行事で、一般の住民は自分が所属する殿の祭日を期して祈願に参加するだけであり、そのような祭祀そのものの構造が、今日、両者の間で関心や参与の乖離を促しているとも考えられよう。

ところが他方で、役職者たちの中では、近年になってシマノーシ祭の権限や役割をめぐる競合状態が表面化してきていることが注目される。具体的には、どの家系が祭事担当の正統性をもつのかという判断に関して一部で見解の対立がみられるのであり、これは他の地域でも報告されているように〔たとえば、笠原1980, 渋谷1984など〕、現在沖縄の各地で広くみとめられる村落祭祀制の動揺・再編成の趨勢に連なる現象と考えてよい。つまり、神事が村落全体の関心から離れ、次第に少数の神人や役職者の担当すべき事柄として専門化されてくるにつれて、その内部では、祭祀執行者の資格や正統性の問題が、以前にも増して厳格で入り組んだ——場合によっては瑣末にこだわる形での——論議の対象になってきた、ということである。

また現状のシマノーン祭が、古来の祭祀形式を頑なに守ろうとする伝統性を強調しながらも、反面ではそこに、今日的な社会全般の関心事を随所におこみつつ行われている点も見逃せない。たとえば、各殿の祭日の朝、神人たちはノロ家に集まって殿構成員から個々に依頼された祈願をとり行うが、その祈願の内容には、家内安全や健康のほかに、受験や就職から都市転出者の盗難や非行防止まで、種々雑多な現世利益を願うものが含まれていた。本来は公的な村落祭祀であるシマノーン祭も、そのようにきわめて私的な祈願を巧みに吸いあげながら今日の時代に存続しているわけである。

最初にもことわっておいたとおり、本稿では、とりあえずシマノーン祭の祭祀それ自体を素描することに記述してきた。この旅神の神事が渡名喜の祭祀生活や、さらには沖縄・南西諸島の祭祀的世界を理解するうえでいかなる意味と位置づけをもちうるかについては、あらためて別の議論を用意しなければならない。1985年の調査に際しては、上原幸子ノロをはじめ神人の方々が筆者2名の同行観察と写真撮影の許可を神前に願ってくださり、また他の多くの方々からも貴重なご教示をいただいた。記して心から感謝の意を表したいと思う。

引 用 文 献

- 1) 伊藤幹治 1980『沖縄の宗教人類学』弘文堂。
- 2) 小野重朗 1970「海と山の原郷——南島文化二元論——」谷川健一(編)『叢書わが沖縄6・沖縄の思想』(木耳社) 307—338頁。
- 3) 笠原政治 1980「八重山離島における「神元」の系譜構造」南島史学会(編)『南島——その歴史と文化——』(第一書房) 3: 253—273頁。
- 4) 渋谷研 1984「沖縄本島北部一農村におけるユタ発生の構造」『日本民俗学』156: 47—64頁。
- 5) 住谷一彦・J. クライナー 1977『南西諸島の神観念』未来社。
- 6) 瀬川清子 1969『沖縄の婚姻』岩崎美術社。
- 7) 知念勉之助 1934「慶良間の山の神」『島』昭和9年前期号, 509—590頁。
- 8) 渡名喜村史編集委員会(編) 1983『渡名喜村史』〔上・下〕渡名喜村。
- 9) 仲松弥秀 1979「渡名喜村落の形成」『渡名喜島の遺跡Ⅰ』(渡名喜村教育委員会) 49—59頁。
- 10) 比嘉政夫 1982『沖縄民俗学の方法——民間の祭りと村落構造——』新泉社。
- 11) 松園万亀雄 1970「沖縄座間味島の門中組織」『日本民俗学』71: 1—28頁。
- 12) 武藤美也子・平野祐二・中沢章浩・中村照明 1981「沖縄の祭祀——渡名喜村「島直シ」祭祀——」『地域文化研究』(甲南大学地域文化研究会) 4: 1—20頁。
- 13) 村武精一 1984『祭祀空間の構造——社会人類学ノート——』東京大学出版会。